～広島の恩人～
マルセル・ジュノー
無償の愛

赤十字の車の前に立つジュノー。

マルセル・ジュノー。スイス生まれのひとりの医師。
赤十字国際委員会（ICRC）の派遣員でありながら、
国や人種、宗教なども超えて、おそれることなく、負けることなく、
自らの力で数々の人道的支援に人生を捧げました。
また、被爆地となった広島へ15トンもの医薬品を届けた、広島の恩人。
しかしながら、彼のその貢献はそれほど知られていないのです…。
無償の愛で立ち向かっていった、ひとりの男の人生とは…。

ジュノー博士の足跡をたどる

敬けんなフランス人牧師であった父リチャードと、ジュネーブ出身の母ジャンヌの5番目の子として、1904年5月14日に生まれたマルセル・ジュノーの人生を探っていきます。

ジュノーの家族。父親の下で椅子に座っているのが6歳のジュノー。

被爆地の医療救援のため「広島の恩人」が奔走

1945年（昭和20）8月6日、広島に投下された悪魔の兵器「原爆」。一瞬にして焼け野原と化した広島に、献身的な医療救援活動で、多くの人びとの命を救った誇り高き医師が舞い降りました。赤十字国際委員会の駐日主席代表マルセル・ジュノーです。

当初、ジュノーが来日した目的は、連合国軍の捕虜調査のためでしたが、原爆投下直後の広島の惨状、とりわけ「薬がない」という情報を耳にするや、マッカーサー総司令官に広島への医薬品の提供を請願します。被爆地の情報を機密にしたい司令部に一度は拒否されますが、人命を助けることを使命としているジュノーはあきらめません。「傷ついて苦しんでいる人が目の前にいるのに、手をこまねいているわけにはいかない」と、持ち前の熱意でもって交渉。ついには15トンの薬とともに自らも広島に入ることを承諾させます。そして、広島に送られた薬は、それまで日本になかったペニシリンなどで、その効き目に人びとは驚嘆しました。

負傷者の治療に奔走する彼の姿に、誰ともなく「広島の恩人」と称し心中で手をあわせたといいます。ジュノーは1万人以上のかけがえのない命を救っただけでなく、広島の被爆者たちの心の支えとしても貢献したのです。

憎むべきは戦争であって人間ではない

ジュノーは1904年、フランス国境に近いスイスの山村に生まれました。困っている人や助けを求めている人にすすんで手を差しのべる彼の博愛精神は、牧師をしていた父の薫陶をうけて培われたようです。

18歳のジュノー。

しかしジュノーが15歳のとき、父が心臓発作で急逝。その父の遺志を継ぐために彼が選んだのは医学の道でした。ジュネーブ大学を卒業後、外科医として手腕を振るっていたジュノーに人生の転機が訪れたのは31歳のときでした。

「赤十字国際委員会の派遣員としてエチオピアに行ってほしい」

ファシズムが横行していた当時、イタリア軍がエチオピアに侵攻し、戦禍は拡大していました。悩んだ末に向かったエチオピアでは、目を覆わんばかりの惨状が毎日繰り広げられていたのです。人を人とも思わぬ残虐行為によって、消耗品のように失われる生命。己の無力さや人間の醜さに打ちひしがれたジュノーでしたが、人間が本来もっている愛を信じて困難に立ち向かっていきます。

「憎むべきは戦争であって、人間ではない」と。

広島県商工経済会の屋上から見た広島県産業奨励館と爆心地付近。 米軍撮影　広島平和記念資料館提供

赤十字国際委員会の派遣員として、戦地エチオピアで。

文通システムのおかげで、家族に手紙を書けるようになった人たち。

国境を越えた無償の愛で捕虜の処遇改善を実現

エチオピアから戻ったジュノーを待ちうけていたのは、スペイン内戦の報せでした。またしても赤十字から白羽の矢を立てられたジュノーは、捕虜の処遇改善などに尽力することになります。

その3年後には、第二次世界大戦が勃発。ジュノーは何度もヨーロッパ国境を飛び越え、各国の捕虜の処遇改善を訴えます。このとき考案されたのが、赤十字を介した捕虜と家族の文通システム（赤十字通信）。それによって、捕虜の生存を確認できた多くの家族たちが嬉し涙にくれたといいます。彼は傷ついた人々の介護だけではなく、数千人の捕虜の命を救い出すことに成功するのです。

「貴国の捕虜の扱いが酷ければ、相手国もそれ以上のことをあなたたちの同胞に強いることになるのです」

彼の粘り強い説得は、赤十字が医薬品などの救援物質を運ぶための輸送航路を確保させるなど、国境や民族を越えて結実していきました。

そして、1945年、ジュノーが日本行きを依頼されます。しかし、当時の日本軍が彼に許可した入国ルートは、カイロからシベリア、満州を経由して東京に入るという大変な迂回路。約2ヵ月間の旅路を経て彼が東京に到着したのは、広島の原爆投下から3日後、長崎に原爆が落とされた日でした。

赤十字国際委員会の飛行機の前で。

助けを待つ叫びがある限りジュノーの遺志は終わらない

ジュノー自身は広島を駆けめぐっていたので、長崎に赴くことはできませんでした。しかし広島と同様に、長崎への医薬品搬送などの救援活動を指揮し、多くの命を救ったことが記録されています。

赤十字国際委員会の駐日主席代表としての任務を果たしたジュノーは、1946年ジュネーブに帰国。以降は医者としての活動を再開するとともに、ユニセフの活動や、核兵器の廃絶を世界に訴え続ける活動にも身を捧げたのです。

1961年6月16日。勤務していたスイスの病院で担当患者の退院見送りをしていたジュノーは、心臓発作を起こして57歳の若さで帰らぬ人となりました。

しかし彼が育んだ「慈愛の精神」という遺志は、多くの人びとによって受け継がれていきます。広島平和記念公園の一角にたたずむ顕彰碑には、ジュノーの著作『第三の兵士（邦題：ドクター・ジュノーの戦い）』から次のような引用文が刻まれました。

「無数の叫びが、あなたたちの助けを求めている」

マルセル・ジュノー。ひとりの男が、国境を超えて、無償の愛で駆けめぐった人生…。

1945年、日本を訪れたジュノー（右）。

ジュノー博士が広島に届けた医薬品

ジュノー博士の努力により、広島に提供された医薬品は1万人の患者を1ヵ月治療するだけの量があったといいます。被爆後の広島では、医薬品不足の状態が続いたため、これらの医薬品によって命を救われた被爆者も多かったのです。その当時の医薬品のいくつかが「広島平和記念資料館」内に展示されています。

広島平和公園の東南にあるジュノーの記念碑。